

防災問題における資料解析研究 (37)

林 春男・矢守克也・牧 紀男・鈴木進吾

要 旨

巨大災害研究センターでは、所員それぞれの研究テーマ以外に、センター全体に関わる活動を継続し、研究成果のアカウンタビリティの向上に貢献している。本年は、1) 巨大災害研究センターセミナー、2) 第15回地域防災計画実務者セミナー、3) 災害対応研究会、4) 第10回比較防災学ワークショップ、5) 第7回ワークショップ災害を観る、6) 自然災害データベースについて内容を紹介する。

キーワード: データベース、巨大災害、比較防災学、セミナー、ワークショップ

1. 巨大災害研究センターセミナー

巨大災害研究センターでは防災研究所内にて不定期にオープンセミナーを開催している。本セミナーは本学情報学研究科の特別講義としても位置づけられている。各回話題提供者は1名で、出席者は、毎回当センターの関係教官、学生をはじめ、所内の他のセンター、部門の教官、情報学研究科の大学院生などであり、活発な議論を重ねている。開催日と講演者名及びタイトルは以下の通りである。

・ 第1回 (2009年6月5日)

「柏崎市におけるり災証明書発行GISシステムの開発及び被災者台帳の構築 The Development of GIS-Based Damage Certificate Issuing System and Victims' Database in Kashiwazaki City」

吉富 望 (京都大学防災研究所巨大災害研究センター・研究員)

・ 第2回 (2009年10月2日)

「神戸発 復興危機管理」

金芳 外城雄 (神戸学院大学学際教育機構防災・社会貢献ユニット・教授/京都大学防災研究所巨大災害研究センター・非常勤講師)

・ 第3回 (2009年11月6日・総合防災グループセミナーとの共同開催)

「建造物の強風被害について」

近藤 宏二 (鹿島技術研究所都市防災・風環境グループ長/京都大学防災研究所巨大災害研究センター・客員准教授)

「1995年兵庫県南部地震から15年でわかったことー神戸市域の震災帯の再現を中心にー」

松島 信一 (京都大学防災研究所社会防災研究部門准教授)

・ 第4回 (2009年12月4日)

「環境シグナル現場論 Environmental signal and integrated implementation」

村瀬 誠 (東邦大学薬学部・客員教授/京都大学防災研究所巨大災害研究センター・非常勤講師)

2. 第15回地域防災計画実務者セミナー

「地域防災計画実務者セミナー」は、自治体の防災担当職員を主たる対象者として都市防災・地域防災についての理解を深める一助として、阪神・淡路大震災が起こった1995年8月に3日間にわたって第1回セミナーを開催して以来、毎年開催を続けている。セミナーでは、自然災害の外力の特性を理解すること、災害対策を危機管理の立場から実施すること、およびその実例を紹介することを目的として、毎年講演題目を組み立てている。第15回目を迎えて、本年度は風水害からの避難のあり方をテーマに、初日に風水害対策研究の最前線について、2日目には風水害の避難について(被災地間の経験の伝承)紹介し、最終日には最近の政府の取り組みを紹介した。芝蘭会館・山内ホールに於いて3日間にわたって以下のプログラムで開催した。セミナー参加者の関心も高く、初日76名、2日目112名、最終日67名の参加をえた。

- ・第1日目（平成21年11月17日）プログラム
《風水害対策研究の最前線》
13:30 挨拶（巨大災害研究センター・准教授 牧紀男）
13:40～14:40 講義1「土木学会による佐用町水害調査に参加して」(生存基盤科学研究ユニット・助教 小林健一郎)
14:55～15:55 講義2「高齢・少子化時代の避難のあり方」(新潟大学危機管理室・教授 田村圭子)
16:10～17:30 講義3「水害からの避難のあり方」(関西大学環境都市工学部・教授 河田恵昭)
17:30 終了

- ・第2日目（平成21年11月18日）プログラム
《風水害の避難について再度考える》
〈これまでの災害を振り返る〉 司会：牧紀男
9:00～9:05 はじめに
●2004年新潟水害－三条市の事例－
9:05～9:10 「被害の概要と課題」(新潟大学危機管理室・教授 田村圭子)
9:10～9:55 「行政の立場から」(三条市総務部行政課防災対策室・主任 石塚 衛)
●2004年台風23号災害
9:55～10:05 「被害の概要と課題－京都府の事例－」(京都府府民生活部危機管理・防災課・課長 今井真二)
10:05～10:35 「2004年台風23号－京都府舞鶴市バス救助事案－」ビデオ上映
10:50～10:55 「被害の概要と課題－豊岡市の事例－」(兵庫県企画県民部防災企画局防災計画室・防災計画係長 山本晋吾)
10:55～11:40 「みんなの力で命とくらしを守る(台風23号災害以降の豊岡市の防災・減災への取り組み)」(兵庫県豊岡市・防災監 北垣哲夫)
●2008年愛知県岡崎市水害
11:40～11:45 「被害の概要と課題」(富士常葉大学環境防災学部・准教授 木村玲欧)
11:45～12:30 「行政の立場から」(岡崎市市長公室防災危機管理課・課長 山本啓二)
〈本年度の風水害事例から避難のあり方を考える〉 司会：牧紀男
13:30～13:35 はじめに
●2009年山口豪雨災害
13:35～13:40 「被害の概要と課題」(新潟大学危機管理室・教授 田村圭子)
13:40～14:25 「福祉施設からの避難を考える」(新潟医療福祉大学社会福祉学科・准教授 岡田 史)
●平成21年台風9号水害・兵庫県佐用町
14:25～14:30 「被害の概要と課題」(巨大災害研

- 究センター 牧紀男)
14:30～15:15 「自宅での避難を考える」(人間文化研究機構国立民族学博物館・准教授 林勲男)
15:15～16:00 「車で移動中の被害を考える」(NTT環境エネルギー研究所・主任研究員 東田光裕)
16:15～17:30 パネルディスカッション
コーディネーター：巨大災害研究センター 牧紀男
パネリスト：話題提供者全員
17:30 終了

- ・第3日目（平成21年11月19日）プログラム
《国の動きを知る》
9:00～10:00 「大規模災害時の政府の対応－政府調査団の派遣など－」(内閣府政策統括官(防災担当)付参事官(災害応急担当) 山崎一樹)
10:00～11:00 「総務省消防庁の取り組み－最近の風水害事例にふれながら－」(総務省消防庁国民保護・防災部・参事官 深澤良信)
11:15～12:15 「土砂災害の現状と対策について」(国土交通省河川局砂防部砂防計画課・課長補佐 中村圭吾)
12:15 閉会の挨拶(巨大災害研究センター 牧紀男)
12:20 終了

3. 災害対応研究会

3.1 概要

平成10年4月17日から、災害発生後の災害過程について体系的な理解を確立することを目的とし、毎年4回、セミナーを開催してきた。話題提供者は各回2名で、出席者は、毎回、当センターの関係教官をはじめ、行政の防災関係者、研究機関の教官、医療関係者、教育関係者、防災関係企業、NPO、マスコミ関係者等と多岐にわたり、活発な議論を重ねている。平成21年度の講演のキーワードは、「Ed Blakely氏を迎えて復興について考える」、「Business Flow Diagram (BFD)をまなぶ」、「林勲男ワールドを訪ねて－災害と地域特性：文化人類学・地域研究からのアプローチ」、「新型インフルエンザの危機管理を考える」であった。開催日時と講演者名及びタイトルは、以下の通りである。ただし、平成22年1月には、神戸国際会議場で行われた神戸市主催の第3回「災害対策セミナー in 神戸」に参加し、比較防災学ワークショップ（「4. 比較防災学ワークショップ」を参照）と共催にて、公開シンポジウム形式で研究会を実施した。

3.2 開催日程

・第1回

＜Ed Blakely氏を迎えて復興について考える＞

Ed Blakely氏は現在ニューオリンズ市の復興本部長である。ニューオリンズの復興は、当初は思うように進まず、復興計画すらできず、ようやく、2007年1月にUNOP（統合ニューオリンズ復興計画）が完成した。同時期にネーギン市長が、Blakely氏を招聘し、彼の指導のもとで、ニューオリンズの復興は徐々に軌道に乗ってきているという評価を受けている。Blakely氏は、1991年のオークランド市の大火後の対応や9/11での対応で大きな役割を担い、都市計画分野の重鎮である。彼が明治大学の招きで4月中旬に来日する機会をとらえて研究会を開催した。

日本側からも阪神淡路大震災からの復興についての2題をお話いただいた。第1は、JAZZを中心とした神戸とニューオリンズの復興に関する交流について、神戸とニューオリンズのジャズ交流実行委員会を代表して神戸市の太田敏一氏、第2はPDCAサイクルに則った市民参画型の復興の進捗管理について神戸都市問題研究所の本荘雄一氏が報告した。話題提供は英語で行い、通訳を同志社大学の立木茂雄先生にお願いした。

日時：平成21年4月24日(金)13:30～16:30

参加者数：38名

「ハリケーンカトリーナからのニューオリンズ市の復興」(ニューオリンズ市復興本部長 Ed Blakely)

「神戸とニューオリンズのジャズ交流～大災害からの復興における文化の役割～」(神戸とニューオリンズのジャズ交流実行委員会 太田敏一)

「阪神淡路大震災の教訓」(財団法人神戸都市問題研究所・常務理事 本荘雄一)

・第2回

＜Business Flow Diagram(BFD)をまなぶ＞

第2回は京都大学防災研究所林研究室で最近開発したBusiness Flow Diagram (BFD)の講習会を実施した。BFDは業務プロセスを可視化するツールであり、これとエスノグラフィとを組み合わせることで災害対応業務の見える化や、災害対応マニュアルの見直し、などを手戻りなく進め、災害対応業務の標準化が可能になる。この日は1日プログラムとして、午前中には、ベストプラクティス紹介として、BFDを利用した災害対応マニュアルの見直し・作成を行った榎原市と大阪市水道局に事例発表をお願いした。午後は、出席者全員が参加してBFDの使い方を実習した。

日時：平成21年7月24日(金)10:30～16:30

参加者数：58名

「奈良県榎原市での防災マニュアル作成と地域防災計画の策定」(榎原市危機管理室危機管理課・課

長補佐 立辻満浩)

「大阪市水道局における事業継続計画の策定」(大阪市水道局工務部・危機管理担当課長 江口勝彦)

実習「Business Flow Diagramをまなぶ」(京都大学生存基盤科学研究ユニット・助教 浦川豪)

・第3回

＜林勲男ワールドを訪ねてー災害と地域特性：文化人類学・地域研究からのアプローチ＞

第3回は、国立民俗学博物館の林勲男先生によるプログラム編成で、林先生をはじめとする災害人類学を研究される皆さんの最近のご研究・ご活躍をご紹介いただいた。

日時：平成21年10月23日(金)13:30～16:30

参加者数：37名

「災害研究とエスノグラフィ」(国立民族学博物館／総合研究大学院大学・准教授 林勲男)

「トルコ・マルマラ地震から10年：復興から防災へ」(京都大学東南アジア研究所・特任助教 (G-COE) 木村周平)

「中国・汶川地震における復興状況：対口(たいこう)支援と資源化される〈羌文化〉」(愛知大学大学院中国研究科・教授 松岡正子)

・第4回「災害対応研究会」公開シンポジウム

比較防災学ワークショップとの共催にて開催した。(「4. 比較防災学ワークショップ」を参照)

4. 第10回比較防災学ワークショップ

ーみんなで防災の知恵を共有しようー

10th Workshop for “Comparative Study on Urban Earthquake Disaster Management”

4.1 開催趣旨

自然災害は、自然現象であり、同時に社会現象でもある。阪神・淡路大震災をきっかけとして、「災害に強い社会」を作るためには社会現象としての災害についての研究の必要性が明らかになった。

阪神・淡路大震災をはじめ、米国・ノースリッジ、台湾・集集、トルコ・マルマラ地震災害による都市地震災害、2001年の911WTCテロ災害や国内での有珠山、三宅島、雲仙・普賢岳などの噴火災害、2004年9月5日に発生した紀伊半島南東沖地震、10月23日に発生した新潟県中越地震、12月26日に発生したスマトラ島沖地震・津波災害、また、風水害については1998年と1999年の全国的な氾濫災害と土砂災害、さらに、2004年に日本各地を襲った風水害や2008年には全国的にゲリラ豪雨災害が多発した。これらに共通することは被害様相が国や地域によって大きく異なる特

徴をもっているということである。

このワークショップは地域によって異なる様相を示す災害について、さまざまな角度から比較・検討する場を作ろうとする試みである。地域、文化、時間、季節、立場、年齢、男女等の比較を通じて、生活と防災に関する新しい発見が生まれることが期待されている。

2001年から始まったこのワークショップは、当時進行していた都市地震災害に関する日米共同研究の成果を共有する場として、特に災害の社会的側面に焦点を当てた研究に関するワークショップとしてスタートした。第1回比較防災学ワークショップは神戸国際展示場で、2001年1月18日・19日に、第2回は、神戸国際会議場で2002年2月14日・15日、第3回は、神戸国際展示場で2003年1月30日～31日に開催した。

都市地震災害に関する日米共同研究の終了後も、比較防災学の推進の必要性は何ら減ずる訳ではなく、むしろこうした機会を継続する必要性は一層高まったと考え、以下に述べるようにこのワークショップの性格を明確化した上で、今後も毎年1月、または2月に神戸で開催することを決定した。

- [1] 従来のワークショップと違い、講演を中心とするのではなく、広く会場から意見の提出を求め、それを集約するやり方で会場運営し、全参加者の能力向上を目指すユニークな試みである。
- [2] 比較防災学に関するワークショップは世界で初めての開催であり、21世紀の初めにそれを開催し、継続するインパクトは大きい。
- [3] 会場が毎年、同じ場所に固定されており、継続性の高いワークショップである。
- [4] メモリアル・カンファレンス・イン神戸（現在、「災害メモリアル神戸」として継続中）とセットで、1つの震災記念事業として位置づけられる。
- [5] 研究者のみならず、行政の防災担当者、災害情報分野の民間企業の社員などが、これまでになかったオープンな雰囲気活発な意見交換ができる。

以上の方針にもとづいて、第4回を神戸国際展示場で2004年1月29日～30日、第5回を神戸国際展示場で2005年1月20日・21日、第6回を神戸国際展示場で2006年1月17日・18日、第7回を神戸国際会議場で2007年1月18日・19日、第8回を神戸国際会議場で2008年1月16日、第9回を神戸国際会議場で2009年1月16日に開催した。今年度も第10回として、また今回よりは、災害対応研究会（「3. 災害対応研究会」参照のこと）との共催で、神戸国際会議場にて2010年1月19日、20日に開催した。

4.2 開催日時

2010年1月19日(火)14:00～17:00、1月20日(水)10:00～17:00

4.3 開催場所

神戸国際会議場5階501会議室

4.4 プログラム

「新型インフルエンザの危機管理を考える」

<2010年1月19日>

14:00～14:05 開会挨拶（関西大学理事・教授 京都大学名誉教授 河田恵昭）

14:05～15:25 基調講演1：「新型インフルエンザから学べること」（神戸市立医療センター中央市民病院・小児科部長・感染症科部長 春田恒和）

15:35～17:00 基調講演2：「新型インフルエンザの危機管理」（関西大学理事・教授／京都大学名誉教授 河田恵昭）

<2010年1月20日>

ー新型インフルエンザの危機対応事例に学ぶー

10:00～10:40 「京都府の事例ー検証会議の結果からー」（京都府府民生活部・危機管理・防災課長 今井真二）

10:40～11:20 「ーパンデミックに備えて 危機管理体制と業務継続の視点からー京都市における新型インフルエンザ対策」（京都市消防局防災危機管理室・危機管理課長 宿久勝彦）

11:20～12:00 「橿原市の事例ー地震防災マニュアルから新型インフルエンザマニュアルへー」（橿原市危機管理室危機管理課・課長補佐 立辻満浩）

13:30～14:10 「兵庫県の事例ー検証会議の提言を踏まえた新型インフルエンザ対策ー」（兵庫県企画県民部防災企画局 防災計画室長 村田昌彦）

14:10～14:50 「神戸市の経緯から対策の課題を探る」（神戸市 保健福祉局長 桜井誠一）

14:50～15:30 「大阪市水道局の対応」（大阪市水道局工務部 危機管理担当課長 江口勝彦）

15:45～17:00 パネルディスカッション「新型インフルエンザの危機対応を考える」

コーディネーター：京都大学防災研究所巨大災害研究センター長・教授 林 春男

パネリスト：河田恵昭、事例報告者全員

17:00 終了

4.5 研究成果

[1] 延べ100名が参加した。

[2] 2009年は、新型インフルエンザに対する危機管理・対応が大きな課題となった年であった。年頭から強毒性の新型インフルエンザ（鳥）のバ

ンデミックを想定した事業継続計画の策定・危機対応訓練、また4月からは弱毒性の新型インフルエンザ(豚)が実際に世界的に大流行した。本シンポジウムでは、新型インフルエンザの危機管理・対応のあり方について、実際に危機対応を行った自治体が行った検証結果をもとに一元的危機管理体制について検討を行った。

[3] 研究成果の詳細をまとめた第10回比較防災学ワークショップProceedingsを刊行した。

5. 第7回ワークショップ「災害を観る」

巨大災害研究センターでは、1998年から2年に1回「災害を可視化する」をキーワードに災害・防災研究における「可視化」に関する様々な事例について共有することを目的としたワークショップを開催している。今回、第7回目となる「災害を観る7」を、2010年3月2日～3日にかけてキャンパスプラザ京都において開催された。大学、企業、自治体から60人が参加し、活発な議論が行われた。

このワークショップは、座長がコーディネーションを行いその分野における新しい試みを紹介するコーディネーションセッションと公募セッションから構成されている。コーディネーションセッションでは「ユビキタス社会の新技术」（座長：東田光裕・NTT環境エネルギー研究所）、「災害対応」（座長：田中聡・富士常葉大学）、「ハイパフォーマンスコンピューティング(HPC)と減災」（座長：越村俊一・東北大学）、「GISの新たな試み」（座長：中谷友樹・立命館大学）、「2007年新潟県中越沖地震の災害対応とGIS」（座長：田村圭子・新潟大学危機管理室）という5つのテーマについて最新の「可視化の取り組み」が紹介された。また、公募セッションでは2件の災害の可視化に関わる取り組みが報告された。

1日目のセッションでは、企業・大学で開発されている最先端技術を使った取り組みが紹介され、直前に発生したチリ津波のシミュレーション結果についても報告が行われた。2日目のセッションでは主として自治体の取り組みが報告され、2007年新潟県中越沖地震におけるGISを活用した災害対応や通常業務へのGISの活用方法の模索などが紹介された。

・第1日目（平成22年3月2日）

10:00-10:20 開会挨拶（京都大学防災研究所巨大災害研究センター長・教授 林春男）

●10:20-11:50 ユビキタス社会の新技术<座長：東田光裕（NTT環境エネルギー研究所）>

10:20-10:35 座長による本分野のレビュー

10:35-11:00 「タンジブル・ユーザ・インタフェースを適用した防災ソリューションの提案」（NTTコムウェア株式会社 小林和恵）

11:00-11:25 「GEOSPACEプラットフォームの開発と展望」（株式会社NTT-ME 朝比奈秀文）

11:25-11:50 「災害対策本部における状況認識統一のための主題図作成支援ツールの開発」（株式会社NTTデータCCS 大村 径）

12:40-13:00 ランションセッション「災害対応を観る-TRENDREADER(TR)TMを用いた災害対応情報の抽出」（京都大学防災研究所・佐藤翔輔）

●13:00-14:00 災害対応<座長：田中聡（富士常葉大学大学院環境防災研究科）>

13:00-13:15 座長による本分野のレビュー

13:15-14:00 「DIY減災の可能性」（富士常葉大学大学院環境防災研究科 高島正典）

●14:10-15:15 ハイパフォーマンスコンピューティング(HPC)と減災<座長：越村俊一（東北大学大学院災害制御研究センター）>

14:10-14:25 座長による本分野のレビュー

14:25-14:50 「災害シミュレーションのリアリティ」（プロメテック・ソフトウェア株式会社 川上浩）

14:50-15:15 「GEO Gridが提案する次世代型リアルタイム地震動マップ(QuiQuake)」（産業技術総合研究所 松岡昌志）

●15:25-16:15 公募セッション<座長：牧 紀男（京都大学防災研究所巨大災害研究センター）>

15:25-15:50 「豪雨崩壊や地すべりのGISによる可視化と解析」（愛媛大学社会連携推進機構防災情報研究センター・愛媛大学GIS研究会 山岸宏光）

15:50-16:15 「小型無人機を用いた空からの被災状況把握」（宇宙航空研究開発機構 原田賢哉）

●16:30-18:00 GISの新たな試み<座長：中谷友樹（立命館大学文学部）>

16:30-16:35 座長による本分野のレビュー

16:35-17:05 「身体地図情報システムによる傷害情報の記述・分析・可視化」（産業技術総合研究所北村光司）

17:05-17:35 「自己組織化マップを用いた人口変動の地理的特性の可視化—阪神淡路大震災前後の神戸市既成市街地を事例として」（日本学術振興会特別研究員・立命館大学 桐村 喬）

17:35-18:00 「iフォーラム～道路空間上を移動している移動体に対する防災・災害情報の伝達手法の研究～」(インクリメントP(株) サービスプラットフォーム本部 須藤 三十三)

・第2日目（平成22年3月3日）

●9:30-11:00 2007年新潟県中越沖地震の災害対応とGIS<座長：田村圭子（新潟大学危機管理室）>
9:30-9:45 座長による当該分野のレビュー

9:45-10:10 「新潟県庁における「地図作成班（Emergency Mapping Center）」の活動」（にいがたGIS協議会 坂井宏子）

10:10-10:35 「柏崎市における「地図作成班（Emergency Mapping Center-K）」の活動」（横浜国立大学安心・安全の科学研究教育センター 古屋貴司）

10:35-11:00 「生活再建の実現に向けた「被災者台帳」の構築」（新潟大学災害復興科学センター 井ノ口宗成）

●11:00-12:30 災害とGIS<座長：浦川豪（京都大学生存基盤科学研究ユニット）>

11:00-11:15 座長による当該分野のレビュー「平常時から危機発生時へのシームレスなシステム移行を可能とする位置情報に基づくデータベース構築と全庁的な活用」

11:15-11:40 「宇治市における業務効率化指向の全庁的な位置情報活用」（宇治市役所・総務部IT推進課 田中真也）

11:40-12:05 「石川県輪島市における超スモールスタートの業務効率化・高度化のための全庁的な位置情報活用－2007年能登半島地震の災害対応を経験して－」（輪島市総務部企画課 倉本啓之）

12:05-12:30 「新潟県柏崎市における測量指向の統合型GISからの脱皮と業務効率化・高度化へ向けた位置情報の活用－2007年新潟県中越沖地震の災害対応を経験して－」（柏崎市総合企画部企画政策課情報政策係 本間 努）

12:30-12:40 まとめと閉会挨拶（京都大学防災研究所巨大災害研究センター長・教授 林春男）

6. 自然災害データベース

6.1 データベース“SAIGAI”

巨大災害研究センターでは、その前進である旧防災科学資料センターの設立当初より、国内における災害史資料の収集・解析を行い、これらの資料をもとに比較災害研究、防災・減災などに関する研究を実施してきた。これらの実績を踏まえて、昭和57年度よりデータベース“SAIGAIX”を構築し、旧防災科学資料センター所蔵の論文ならびに災害関連出版物の書誌情報を登録してきた。この“SAIGAIX”は、平成元年度に科学研究費（研究成果公開促進費）の補助を受けて全国的な文献資料情報データベース“SAIGAI”として拡充された。現在、本センターを中

核として、全国各地資料センター（北海道大学・東北大学・埼玉大学・名古屋大学・九州大学）の協力のもとでその構築作業が継続されている。

昭和58年に文献検索に資するため、科学研究費・特別研究「自然災害」の補助を受けて「自然災害科学キーワード用語集」が刊行された。平成2年に検索サービスは、京都大学大型計算機センターのデータベースへ移行し、大学間ネットワーク（N1システム）に加入している大学であれば、日本語端末を用いて資料の検索が可能になった。平成6年には、キーワードの追加・体系化を行った改訂版が「自然災害科学キーワード用語・体系図集」が刊行された。平成10年、平成20年に、データベースの処理能力増強を目的とした計算機システムの更新を行った。検索システムはWWW上に構築され、各ユーザーはパーソナル・コンピュータなどのwebブラウザから自由にアクセスが可能となっている。平成21年度には新たに約8,000件の資料を登録し、登録されているデータは、平成22年3月現在で10万6036件と、10万件を超えた。なお、データベース“SAIGAI”はURL、<http://maple.dpri.kyoto-u.ac.jp/saigai/>でアクセス可能である。

6.2 災害史料データベース

巨大災害研究センターでは、昭和59年度より歴史資料に現れる災害及びその対応等の関連記事をデータベース化するプロジェクトを実施している。

その成果として蓄積されてきた史料とその現代語訳データは「災害史料データベース」として、公開している。平成16年に、データベースをウェブ上で検索可能にし、表示できるようにする公開用プラットフォームが科学研究費補助金の交付を受けて作成され、データベースにはURL、<http://maple.dpri.kyoto-u.ac.jp/saigaishiryo/>でアクセス可能となっている。

平成21年度は西暦1184年から1259年までの史料の現代語訳を行った。災害史料データベースに登録されている史料データは、平成22年3月現在で、西暦599年～1615年までの1万3632件に達し、1259年までの現代語訳が完了した。現在は1615年以降の史料の収集を継続している。

Information Analysis in the Field of Natural Disaster Science (37)

Haruo HAYASHI, Katsuya YAMORI, Norio MAKI, and Shingo SUZUKI

Synopsis

The objectives of this paper are to summarize the research activities of Research Center for Disaster Reduction Systems, DPRI. They are systematically organized by not only our staff members but also many researchers and practitioners who do voluntary work in some workshops and symposia. Open symposia were held monthly with large audience. The 15th Seminar for Regional Disaster Prevention Plan was held focusing on the flood disaster reduction. The 10th Workshop on Comparative Disaster Studies was held to discuss the emergency management for pandemic influenza of 2009. The 7th Workshop on Visualization for Disaster Reduction was held to provide an integrated review on the ICT and GIS technology for disaster reduction. We are also upgrading and expanding the database SAIGAI and historical disaster database.

Keywords: database, catastrophic disaster, comparative disaster studies, seminar, workshop